

おかえり、僕の恋人

白髪になりたい系男子

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## あらすじ

何となく書いてみた短編小説。

実は私、海上自衛隊に入隊することになっています。

平和を護りたいという気持ちと共に、大和の艦名を受け継ぐ護衛艦にいつか乗れるならば……と淡い恋心を彼女に抱いていたり。

今回の小説はそんなお話です。

# 目次

おかえり、僕の恋人

—  
1



# おかえり、僕の恋人

「……君の名前を知ってから、もう何年経つのかな」

一人の男性が高い塔の上に立っている。

岸には多くの鉄の城が浮かび、桜が咲き誇っていた。

庇の付いた白い軍帽、白のダブルスーツ。

胸には多くの徽章を付けている。

肩には一等海佐、つまりは大佐の階級を表す章がその存在を目立つものにしていた。

「もしかしたら、ある意味恋なのかもしれないね……。僕は、君に恋をしていた。あの時、君を知ってから」

波風が彼のスーツを揺らす。

それと共に、海辺の公園から流れてきたのか、桜の花びらが彼の周りを舞い踊る。

まるで、彼を待っていたかのように。

まるで、彼がこの場所に立つのを待っていたかのように。

「……もう、君にとっては一世紀前のことだね。君が、この世に生を受けたことは……」  
小皺が少し目立つ唇を小さく動かしながら、静かに、まるで恋人に愛を囁くかのように

に呟く。

どこかしら、歓喜に打ち震えるように声が上がっているようだ。

「二世紀経って、この国に戻ってきて……感想はどうか？ 君が……そしてあの人たちが護りたかつた国があるかな？」

何処か寂しそうに、目を細めて言葉を紡ぐ。

あの戦争……彼は経験していないが、かつて国難を撃ち破る為に世界と戦った大戦争に想いを馳せる。

今ではあの戦争ではこの国は悪だ、と罵られている。

確かに、結果としては悪だったのかも知れない。

現にあの時の政府の、多くの人間は愚かだった。

しかし、国難を前に彼等は戦うしかなかったのだ。

この国を護るために、大切な人を、郷土を護るために……そして、未来の子供達を護るために。

そして彼等は陸に、海に、空に散って逝った。

作戦能力が低度だったが故の過ち、大局を見なかった故の惨たらしい犠牲……。

この国——日本は今、彼等が守りたかつた国になっているのだろうか。

心豊かに、自然豊かに……笑顔溢れる礼節の国になっているのだろうか。

彼にはわからない……しかし、彼は今、この国を護るが為にそこにいた。

「君に出会ったのは……そう。小学生の時だったな。図書室で読んだんだ。君についての物語を」

かつて、世界最強と謳われた鉄の城があった。

かつて、不沈と呼ばれた巨大な海の女王がいた。

しかし彼女は、命懸けの突撃によりその身を崩し……坊ヶ岬に眠っている。

1945年4月7日……ちようど、桜が咲き乱れる季節だった。

「僕はとてもカッコいいと思った。美しいと思った。君が例え……人を殺す兵器だとしても、僕は君を美しいと断言するよ」

ふふつ、と肩を震わして微笑しながらハッキリと宣言した。

その目は、宝物を手に入れたかのように、恋人と結ばれたかのように輝いていて……

「……くやまと」。おかえり。そしておはよう。そして初めまして……僕が君の、新しい司令官だ」

「君はまた、この国の海に蘇った。また、この国を護れるんだ。この国の、平和を」

「……ずっと、憧れていた。君のことを。君が再び生まれることを信じて、僕は海上自衛官になったんだ」

「君と共に……この大好きな日本を、大好きな人達を護りたい」

「……さあ、行くか。これが君の……始まりの朝日だ」

彼が手を挙げると、それと同時に汽笛がなった。

それと共に軽快なマーチが響き渡る。

「イージス護衛艦やまと。進路そのままあ！」

先ほどとは打って変わり、怒声のような声を張り上げて艦橋内の部下達に指令する。

しかしその顔はとても明るくて……。

「進路そのまま！ヨーソロー！」

日本が誇る最高の軍艦、大和。

その生まれ変わり、やまと。

彼女の止まっていた歯車は再び回り出す。

その巨軀で波を乗り越え、この国を護るために。

2000年。4月7日。

護衛艦やまと、就役。



『再びこの海に戻って参りました。やまと型護衛艦一番艦やまと！推して参ります！』